

# 浦島太郎

楠山正雄

青空文庫



むかし、むかし、丹後たんごの国水みづの江えの浦うらに、浦島太郎というりょうしがありました。

浦島太郎は、毎日つりざおをかついでは海へ出かけて、たいや、かつおなどのおさかなをつつて、おとうさんおかあさんをやしなっていました。

ある日、浦島はいつものとおり海へ出て、一日おさかなをつつて、帰ってきました。途中とちゆう、子どもが五、六人往來おうらいにあつまつて、がやがやいっていました。何かなにとおもつて浦島がのぞいて

みると、小さいかめの子を一ぴきつかまえて、棒ぼうでつついたり、石でたたいたり、さんざんにいじめているのです。浦島は見かねて、

「まあ、そんなかわいいそうなことをするものではない。いい子だから」

と、とめました。子どもたちはきき入れようとしなくて、

「なんだい。なんだい、かまうもんかい」

といいながら、またかめの子を、あおむけにひっくりかえして、足でけつたり、砂すなのなかにうずめたりしました。浦島はますますかわいそうにおもって、

「じゃあ、おじさんがおあしをあげるから、そのかめの子を売っ

ておくれ」

といますと、こどもたちは、

「うんうん、おあしをくれるならやってもいい」

といって、手を出しました。そこで浦島はおあしをやってかめの子をもらいうけました。

子どもたちは、

「おじさん、ありがとう。また買っておくれよ」と、わいわいいいながら、行ってしまいました。

そのあとで浦島は、こうらからそつと出したかめの首くびをやさしくなでてやって、

「やれやれ、あぶないところだった。さあもうお帰りお帰り」

といて、わざわざ、かめを海ばたまで持つて行つてはなしてやりました。かめはさもうれしそうに、首や手足をうごかして、やがて、ぶくぶくあわをたてながら、水のなかにふかくしずんで行つてしまいました。

それから二、三日たつて、浦島はまた舟にのつて海へつりに出かけました。遠い沖おきのほうまでもこぎ出して、一いっしょう生けんめいおさかなをつつていますと、ふとうしろのほうで

「浦島さん、浦島さん」

とよぶ声がしました。おやおもつてふりかえつてみますと、だれも人のかげは見えませぬ。その代りかわ、いつのまにか、一ぴきのかめが、舟のそばにきていました。

浦島がふしぎそうな顔をしていると、

「わたくしは、先日助けていた<sup>たす</sup>だいたかめでございます。きょうはちよつとそのお礼<sup>れい</sup>にまいりました」

かめがこういったので、浦島はびつくりしました。

「まあ、そうかい。わざわざ礼なんぞいいにくるにはおよばないのに」

「でも、ほんとうにありがとうございます。ときに、浦島さん、あなたはりゆう宮<sup>ぐう</sup>をごらんになったことがありますか」

「いや、話にはきいているが、まだ見たことはないよ」

「ではほんのお礼のしるしに、わたくしがりゆう宮を見せてあげたいとおもいますがいかがでしょう」

「へえ、それはおもしろいね。ぜひ行ってみたいが、それはなんでも海の底にあるということではないか。どうして行くつもりだね。わたしにはとてもそこまでおよいでは行けないよ」

「なに、わけはございませぬ。わたくしの背中せなかにおのりください」  
かめはこういって、背中を出しました。浦島は半分きみわるくおもいながら、いわれるままに、かめの背中にのりました。

かめはすぐに白い波なみを切つて、ずんずんおよいで行きました。ざあざあいう波の音がだんだん遠とおくなつて、青い青い水の底へ、ただもう夢ゆめのようにはこぼれて行きますと、ふと、そこらがかつとあかるくなつて、白玉しらたまのようにきれいな砂すなの道みちがつづいて、むこうにりっぱな門が見えました。その奥おくにきらきら光つて、目



のくらむような金銀のいらかが、たかくそびえていました。

「さあ、りゆう宮ぐうへまいりました」

かめはこういって、浦島を背中せなかからおろして、

「しばらくお待ちください」

といったまま、門のなかへはいつて行きました。

## 二

まもなく、かめはまた出てきて、

「さあ、こちらへ」

と、浦島を御殿ごてんのなかへ案内あんないしました。たいや、ひらめやかれいや、いろいろのおさかなが、ものめずらしそうな目で見ていなかをとおつて、はいつて行きますと、乙姫おとひめさまがおおぜいの腰元こしもとをつれて、お迎えむかに出てきました。やがて乙姫おとひめさまについて、浦島はずんずん奥おくへとおつて行きました。めのうの天てんじよ井うにさんごの柱ちゆう、廊下ろうかにはるりがしきつめてありました。こわごわその上をあるいて行きますと、どこからともなくいいにおいがして、たのしい楽がくの音ねがきこえてきました。

やがて、水晶すいしゆうの壁かべに、いろいろの宝石ほうせきをちりばめた大おおひ広間ひろまにとおりますと、

「浦島さん、ようこそおいでくださいました。先日はかめのいの

ちをお助け<sup>たす</sup>くださいまして、まことにありがとうございます。なんにもおもてなしはございませんが、どうぞゆつくりおあそびくださいまし」

と、乙姫さまはいつて、ていねいにおじぎしました。やがて、たいをかしらに、かつおだの、ふぐだの、えびだの、たこだの、大小いろいろのおさかなが、めずらしいごちそうを山とはこんできて、にぎやかなお酒<sup>さかもり</sup>盛<sup>さかもり</sup>がはじまりました。きれいな腰<sup>こしもと</sup>元<sup>こしもと</sup>たちは、歌をうたったり踊<sup>おど</sup>りをおどったりしました。浦島はただもう夢<sup>ゆめ</sup>のなかで夢を見ているようでした。

ごちそうがすむと、浦島はまた乙姫さまの案内<sup>あんない</sup>で、御殿<sup>ごてん</sup>のなかをのこらず見せてもらいました。どのおへやも、どのおへやも、

めずらしい宝石でかざり立ててありますからそのうつくしきは、とても口やことばではいえないくらいでした。ひととおりに見せし  
まうと、乙姫おとひめさまは、

「こんどは四季のけしきをお目にかけてみましょう」

といつて、まず、東の戸をおあけになりました。そこは春のけし  
きで、いちめん、ぼうつとかすんだなかに、さくらの花が、うつ  
くしい絵のように咲き乱みだれていました。青あお青あおとしたやなぎの枝えだ  
が風になびいて、そのなかで小鳥がないたり、ちようちようが舞ま  
つたりしていました。

次に、南の戸をおあけになりました。そこは夏のけしきで、垣か  
根きねには白いうの花が咲いて、お庭の木の青葉あおばのなかでは、せみや

ひぐらしがないていました。お池には赤と白のはすの花が咲いて、その葉の上には、水すい晶しょうの珠たまのように露つゆがたまっていました。お池のふちには、きれいなさざ波なみが立って、おしどりやかもがうかんでいました。

次に西の戸をおあけになりました。そこは秋のけしきで花壇かだんのなかには、黄きぎく、白しろぎくが咲き乱れて、ぷんといいかおりを立てました。むこうを見ると、かつともえ立つようなもみじの林おくの奥おくに、白きりい霧きりがたちこめていて、しかのなく声こゑがかなしくきこえました。

いちばんおしまいに、北の戸をおあけになりました。そこは冬のけしきで、野には散ちりのこった枯葉かれはの上に、霜しもがきらきら光つ

ていました。山から谷にかけて、雪がまっ白に降り埋うずんだなかから、柴しばをたくけむりがほそぼそとあがっていました。

浦島は何を見ても、おどろきあきれて、目ばかり見はつていました。そのうちだんだんぼうつとしてきて、お酒に酔よった人のようになつて、何もかもわすれてしまいました。

## 三

毎日おもしろい、めずらしいことが、それからそれとつづいて、あまりりゆう宮がたのしいので、なんということもおもわずに、

うかうかあそんでくらすうち、三年の月日がたちました。

三年めの春になったとき、浦島はときどき、ひさしくわすれていたふるさとの夢ゆめを見るようになりました。春の日のぽかぽかあたたっている水みずの江えの浜で、りようしたちがげんきよく舟うたをうたいながら、網あみをひいたり舟をこいだりしているところを、まざまざと夢に見るようになりました。浦島はいまさらのように、「おとうさんや、おかあさんは、いまごろどうしておいでになるだろう」

と、こうおもい出すと、もう、いても立つてもいられなくなるよ  
うな気がしました。なんでも早くうちへ帰りたいとばかりおもう  
ようになりました。ですから、もうこのごろでは、歌をきいても、

踊りおどを見ても、おもしろくない顔をして、ふさぎこんでばかりいました。

その様子ようすを見ると、乙姫おとひめさまは心配しんぱいして、

「浦島さん、ご気分でもおわるいのですか」

とおききになりました。浦島はもじもじしながら、

「いいえ、そうではありません。じつはうちへ帰りたくなつたものですから」

といいますと、乙姫さまはきゆうに、たいそうがっかりした様子をなさいました。

「まあ、それはざんねんでございますこと。でもあなたのお顔をはいけんいたしますと、この上おおひきとめ申しても、むだのよう



におもわれます。ではいたし方かたございません、行つていらつしや  
いまし」

こうかなしそうにいつて、乙姫さまは、奥おくからきれいな宝ほう石せき  
でかぎつた箱はこを持つておいでになつて、

「これは玉手箱たまてばこといつて、なかには、人間のいちばんだいじな  
たからがこめてございます。これをおわかれのしるしにさし上げ  
ますから、お持ちかえりくださいまし。ですが、あなたがもうい  
ちどりゆう宮ぐうへ歸つてきたいとおぼしめすなら、どんなことがあ  
つても、けつしてこの箱をあけてごらんになつてはいけません」  
と、くれぐれもねんをおして、玉手箱たまてばこをおわたしになりました。

浦島は、

「ええ、ええ、けつしてあけません」

といつて、玉手箱をこわきにかかえたまま、りゆう宮ぐうの門を出ますと、乙姫おとひめさまは、またおおぜいの腰元こしもとをつれて、門のそとまでお見送りになりました。

もうそこには、れいのかめがきて待つていました。

浦島はうれしいのとかないのので、胸むねがいつぱいになつていました。そしてかめの背中せなかにのりますと、かめはすぐ波なみを切つて上がつて行つて、まもなくもとの浜べにつきました。

「では浦島さん、ごきげんよろしゅう」

と、かめはいつて、また水のなかにもぐつて行きました。浦島はしばらく、かめの行くゆえを見送つていました。

## 四

浦島は海ばたに立つたまま、しばらくそこらを見まわしました。春の日がぽかぽかあたって、いちめんにかすんだ海の上に、どこからともなく、にぎやかな舟うたがきこえました。それは夢ゆめのなかで見たふるさとの浜べの景色けしきとちつともちがったところはあります。けれどよく見ると、そこらの様子ようすがなんとなくかわっていて、あう人もあう人も、いつこうに見知らない顔ばかりで、むこうでもみような顔をして、じろじろ見ながら、ことばも

かけずにすまして行つてしまします。

「おかしなこともあるものだ。たった三年のあいだに、みんなどこかへ行つてしまはずはない。まあ、なんでも早くうちへ行つてみよう」

こうひとりごとをいいながら、浦島はじぶんの家の方ほうがく角へあ  
るき出しました。ところが、そことおもうあたりには草やあしが  
ぼうぼうとしげつて、家なぞはかげもかたちもありません。むか  
し家の立っていたらしいあとさえものこつてはいませんでした。  
いったい、おとうさんやおかあさんはどうなつたのでしょうか。

浦島は、

「ふしぎだ。ふしぎだ」

とくり返ししながら、きつねにつままれたような、きよとんとした顔をしていました。

するとそこへ、よぼよぼのおばあさんがひとり、つえにすがつてやってきました。浦島はさつそく、

「もしもし、おばあさん、浦島太郎のうちはどこでしょう」  
と、声をかけますと、おばあさんはげんそうに、しよぼしよぼした目で、浦島の顔をながめながら、

「へえ、浦島太郎。そんな人はきいたことがありませんよ」  
といました。浦島はやつきとなつて、

「そんなはずはありません。たしかにこのへんに住んでいたのです」

といたしました。

そういわれて、おばあさんは、

「はてね」と、首をかしげながら、つえでせいびしてしばらくかんがえこんでいましたが、やがてほんとひざをたたいて、

「ああ、そうそう、浦島太郎さんというと、あれはもう三百年も前の人ですよ。なんでも、わたしが子どものじぶんきいた話に、むかし、むかし、この水の江の浜に、浦島太郎という人があつて、ある日、舟にのつてつりに出たまま、帰つてこなくなりました。たぶんりゆう宮へでも行ったのだろうということ。なにしろ

おおむかし  
大昔の話だからね」

こういって、また腰をかがめて、よぼよぼあるいて行ってしま

いました。

浦島はびつくりしてしまいました。

「はて、三百年、おかしなこともあるものだ。たった三年りゆう宮にいたつもりなのに、それが三百年とは。するとりゆう宮ぐうの三年は、人間の三百年にあたるのかしらん。それでは家もなくなるはずだし、おとうさんやおかあさんがいらつしやらないのもふしぎはない」

こうおもうと、浦島はきゆうにかなしくなつて、さびしくなつて、目の前がくらくらくなりました。いまさらりゆう宮がこいしくてたまらなくなりました。

しおしおとまた浜べへ出てみましたが、海の水はまんまんとた

たえていて、どこがはてもしれません。もうかめも出てきませ  
んから、どうしてりゆう宮へわたろう手だてもありませんでした。  
そのとき、浦島はふと、かかえていた玉手箱たまてばこに気がつきまし  
た。

「そうだ。この箱はこをあけてみたらば、わかるかもしれない」

こうおもうとうれしくなつて、浦島は、うっかり乙姫おとひめさまに

いわれたことはわすれて、箱のふたをとりました。するとむらさ  
き色の雲が、なかからむくむく立ちのぼつて、それが顔にかかっ  
たかとおもうと、すうつと消えて行つて箱のなかにはなんにも  
こつていませんでした。その代りかわ、いつのまにか顔じゆうしわに  
なつて、手も足もちぢかまつて、きれいなみぎわの水にうつつた



影<sup>かげ</sup>を見ると、髪<sup>かみ</sup>もひげも、まつしろな、かわいいおじいさんになつていました。

浦島はからになった箱<sup>はこ</sup>のなかをのぞいて、

「なるほど、乙<sup>おとひめ</sup>姫さまが、人間のいちばんだいじなたからを入れておくとおっしゃったあれは、人間の寿<sup>じゆみょう</sup>命<sup>めい</sup>だったのだな」と、ざんねんそうにつぶやきました。

春の海はどこまでも遠<sup>とお</sup>くかすんでいました。どこからかい声で舟うたをうたうのが、またきこえてきました。

浦島は、ぼんやりとむかしのことをおもい出していました。



# 青空文庫情報

底本：「むかしむかしあるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年12月19日公開

2008年10月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 浦島太郎

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>